

第1章 歴史を伝えるアカマツ

ここは札幌市北区麻生町3丁目。道路の真ん中に、大きなアカマツが立っています。高さは約10メートルあり、樹れい（木の年れい）はなんと150歳以上だそうです。幹の直径は60センチメートルあり、大きな大人の人がやっと手を回せるくらいの太さです。大きなアカマツはゆるやかにローマ字の「S」の字のような形をえがきながら空に向かってのびています。どうしてこんなに大きくて立派なアカマツが道路の真ん中に生えているのでしょうか。



▲道路の真ん中のアカマツ

むかし、麻生には、植物の亜麻をあつかう大きな工場がありました。その工場の名前は、「帝国製麻琴似亜麻工場」といい、農作物として育てられた亜麻のくきからせんい（糸の原料になるもの）を取り出す仕事をしていました。

せんいって何？

糸の原料になるととても細いもののことです。植物のくきや動物の毛などから取れる天然のもの（天然せんい）と、石油などをもとに人工的に作られるもの（化学せんい）とがあります。せんいをより合わせて糸が作られ、さらに糸を縦横に組み合わせて衣服などの織物（布）が作られます。



▲亜麻のくきから取り出したせんい

工場には、仕事^{しごと}をするための建物^{たてもの}だけでなく、工場^{はたら}で働く人たちが住む^す家など多くの建物があり、とても広いしき地^じ*がありました。実は、この大きなアカマツは、工場長の家の前^うに植えられていました。



ていこくせいまいことにあまこうじょうようす
▲帝国製麻琴似亜麻工場の様子



▲工場長の家の前に植えられていた
ころのアカマツ

しかし、この工場は、1957（昭和^{しょうわ} 32）年に閉鎖^{へいさ}*されてしまいます。工場の建物^とはすべて取りこわされ、工場のあと地^{だんち}には団地^{あさぶだんち}*（麻生団地）が作られて、人々が住むための新しい家がたくさん建^たてられました。

でも、この大きなアカマツだけは同じ場所^{ばしょ}に残^{のこ}ったのです。「道を通るのにじゃまだから」と切られそうになったり、別の場所^{べつ}に移^{うつ}されそうになったりしたこともありましたが、



▲工場のあと地に作られた麻生団地

町の人たちで話し合い、この地域^{ちいき}の歴史^{れきし}を伝える遺産^{つた}*として未来^{いさん}に残^{みらい}していこうということになったのです。